

筋緊張亢進のある遷延性意識障害患者に対する腹臥位療法の有用性

Prone position therapy for the persistent vegetative patients with hypertonus

原田 里美、青森 由美、松村 望東美、塩田 真由美、北村 吉宏、萬代 真哉、衣笠 和孜、西本 詮
自動車事故対策機構 岡山療護センター

Satomi Harada, Yumi Aomori, Motomi Matsumura, Mayumi Shiota, Yoshihiro Kitamura, Shinya Mandai,
Kazushi Kinugasa, Akira Nishimoto

National Agency for Automotive Safety & Victims' Aid Okayama Ryogo Center, Okayama, Japan

【目的】遷延性意識障害患者においては、しばしば筋緊張が亢進し安楽が阻害される上、日常生活上の活動やリハビリテーションの実施にも支障をきたすことが多い。そこで我々は、筋緊張の緩和を目的として腹臥位療法を試み、その有用性を検討したので報告する。【方法】筋緊張亢進のある遷延性意識障害患者10名に対し、腹臥位を30分間/日、6ヶ月間実施した。実施開始前と実施6ヶ月後の安静時における1)筋トーンス検査(筋弛緩:0点 軽度亢進:1点 中度亢進:2点 重度亢進:3点としてスコア化) 2)バイタルサイン:血圧・脈拍数・呼吸数 3)心電図によるRR間隔検査の値を比較検討した。【結果】1)筋トーンス検査:腹臥位実施前平均 1.9 ± 0.8 点 6ヶ月間実施後平均 1.13 ± 0.6 点と実施後平均値は低下し有意差を認めた。2)収縮期血圧:実施前平均 111.4 ± 10.1 mmHg 実施後平均 95.3 ± 5.4 mmHg。拡張期血圧:実施前平均 67.4 ± 7.8 mmHg 実施後平均 60.5 ± 8.2 mmHg。脈拍数:実施前平均 84.6 ± 16.2 回/分 実施後平均 64.6 ± 5.5 回/分。呼吸数:実施前平均 16.1 ± 2.4 回/分 実施後平均 12.6 ± 0.9 回/分。いずれも平均値は低下し有意差を認めた。3)RR間隔検査:実施前平均 0.04 ± 0.01 秒 実施後平均 0.06 ± 0.03 秒とRR間隔は延長し、有意差を認めた。【考察】腹臥位療法によるバイタルサイン値の低下やRR間隔の延長は副交感神経系の活発な活動を示唆しており、その結果筋緊張レベルをも低下させるのではないかと考えられた。これらにより遷延性意識障害患者における腹臥位療法の実施は筋緊張亢進に対して有用であり、筋緊張の低下による安楽の獲得、日常生活上の活動の拡大、リハビリテーション能力の拡大が期待できる。